

第6学年「てつがく創造活動」学習活動案

授業者 倉次 麻衣

2月16日（金） 2A室 9:00～9:40

1 活動名 ふり返って考えよう（対話）

2 活動について

2学期いっぱいまで全活動が終了したプロジェクト型活動について、ふり返りながら対話をする。低学年から様々に形やテーマを変えて取り組んできたプロジェクト型活動は、多くの子どもたちにとって楽しい時間となっていた。協働しながら「探究」をする時間であるが、一方で、側から見て休み時間との違いは何かを問われる活動でもある。また、ふり返りについては、毎回活動後に各プロジェクトや個人で行っている。しかし、活動の内容同様に個差があり、全体を俯瞰しているふり返りもあれば、活動の記録に過ぎないものもあった。活動が終了した今、子どもたちにとって、プロジェクト型活動の学びとは一体何であったのか、対話を通して考えたい。

評価部会の今年度の重点課題は、「自覚的な評価活動」である。「子どもが“てつがくする”ことを通して、「学びとしての評価」を行う。そして、将来にわたり、自らの学びの評価者であり続けるために、このような評価活動に価値を感じ、自覚的に行う姿を目指す。」（要項p.28）とあるように、3月で小学校を卒業していく子どもたちが、これからの学びに生かせるように、具体例を元にしながら俯瞰的にふり返ること、対話を通して友達の考えや学びを聞くことで、自覚できていなかった価値や学びに気づくことをねらいとして本題材を設定した。

3 学習活動計画（15時間目／全17時間）

第1次 今年度のてつがく対話 …2時間（1学期）

第2次 居心地のよいクラスって …3時間（ Ⅱ ）

第3次 本当の自分とは …6時間（2学期）

第4次 ふり返って考えよう …本時5/6時間（2, 3学期）

（①なぜ嫌な勉強をしなければいけないの？ ②対話が深まるってどういうこと？ ③小学校生活を振り返って）

4 本時の活動について

（1）本時のねらい

- ・プロジェクト型活動を振り返って、自分（自分たち）にとってのプロジェクト（てつがく創造活動）の意義や価値について対話を通して考える。

（2）予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1. 前時の対話の振り返りから本時の話題に入る（15分） 「プロジェクトって何のためにやっているの？（仮）」 「プロジェクトってどうやって決めてきた？（仮）」 「みんなにとってプロジェクトって何？（仮）」 問いを出した人の意見から対話をスタートする 後ろのメンバーは、対話を聞きながら自分でノートにメモをとる	・金魚鉢型（クラスの人数を半分に分けて二重の円で座る）で対話を行う ・最初の問いは予め学級で決めておく ・ファシリテーターは自分たちで行うが時間の管理をしつつ、必要に応じて教員も入る
2. 聴き役（後半メンバー）から質問や意見を出す（5分）	・聴くことに集中するため板書は行わない
3. 前後のメンバーを入れ替えて対話（15分） 前半の話を踏まえて対話をする	・対話の具体的な内容については、事前に問いを集め、どの問いで対話を進めるか子どもたちが決定する
4. 後半の対話に対して質問や意見などフリーに対話する（5分） 全体の話の流れで、皆が共通に挙げているキーワードなどがあれば共有する ※共通点があれば取り上げるが、個に返すため、無理に全体で「まとめ」は行わない	・40分授業（通常60分）のため、各自のふり返りは授業時間内では行わない

5 てつがく創造活動の履歴こ

（1）6年てつがく創造活動の概要（→要項p.p.142-143参照）

6年生では、5年時から毎週月曜日の6校時（60分）を各学級のてつがく対話の時間に、水曜日の6校時（60分）、金曜日の5, 6校時（100分）は学年のプロジェクト型活動（学級の枠なし）に充ててきた。本時は、主にプロジェクト

型活動をテーマに、これまでの取り組みをふり返って対話を進める予定である。よって、次に1・2学期のプロジェクト型活動及び、てつがく対話の履歴を示す。

【プロジェクト型活動の履歴】

① プロジェクトの発足

低学年から続けているてつがく創造活動の中心となる活動で、自分たちでテーマやゴールを決めて取り組んできた。

5年時は、4年生からのジャンプアップということで、調べる・まとめるからさらに深めること、広げることを目指す姿として活動を進めた。6年の4月は改めて一年間取り組む活動のテーマを話し合った。なお、話し合いの進行は各学級から2名ずつ立候補で選出された学年の委員「つくる委員」を中心に行う。つくる委員は必要に応じて休み時間等に集まり、プロジェクトの進め方や共有の仕方を話し合っ全体に提案するなど、てつがく創造活動の運営に携わる。つくる委員の提案により、5年との違いを意識して「活動の規模を大きくすること」や、「これまでの取り組みの集大成として結果や作品を残すこと」を目標に、まずは仲間集めが行われた。取り組みたいテーマを決め、テーマや目指すゴールに近いメンバーでプロジェクトを企画。ただし今年度は6年の目標の下、プロジェクトの数を制限し、2～3人だけの少人数のプロジェクトは似ているテーマのプロジェクトと組んで、より大きいゴールの設定を検討するように促した。最終的に以下の13のプロジェクト（以下一部PJと表記）が発足、5月の連休明けから活動がスタートした。

植物加工、動物、映画作成、西門を開けよう、イラスト・漫画、水彩画・デザイン、池、イベント、DG映画、運動イベント、スカイシップ、雑誌、裁縫・クッキング（下線は4組の子どもが所属しているPJ）

活動場所は、テーマや活動が似ているプロジェクトで4教室を割り振り、最初にゴールまでの計画を立ててから、それぞれの活動に移った。6年生は2学期でプロジェクト型活動を終えるため、同じプロジェクトをゴールまで継続することを原則としたが、活動を進める過程でゴールの見直しや、意見の相違からメンバーの離脱・移動や、プロジェクト自体が2つに分かれるケースが出てきた。その一例を紹介する。

② プロジェクトの分裂 — 「西門を開けよう」PJの場合 —

一つのゴールを目指してプロジェクト内で2つのチームに分かれて活動し、その活動が発展していく様子は規模が大きいプロジェクトに多く見られた。例えば、イベントPJはスタンプラリー形式でクイズ謎解きイベントを開催することをゴールに据え、活動の大半はスタンプラリー用のスタンプ作りをするチーム、クイズ・謎解きの問題作成をするチームに分かれて作業をしていた。その結果手作りスタンプの数が徐々に増え、イベント開催と同時にスタンプの展覧会を開いたり、スタンプを押した手作りのハガキや封筒をイベントの景品として作成したりと活動が広がっていった。

西門を開けようPJは、20年以上開かずの門になっている大学の西門を使用できるようにすることをゴールにしたプロジェクトで、メンバー15名と全プロジェクトの中でも最多数でスタートした。しかし、一学期後半、西門が閉まった理由や、開けるために必要な事が明らかになるにつれ、西門を開けることに対して諦めムードが漂い始める。この頃のプロジェクトメンバーは大きく以下の4つに分かれていた。

A 西門を開けたい、開けられる信じて活動を進めたい発起人を中心とした4人

B 何か大きなことを成し遂げたいと思って参加したが、難しそうなので方法を変えるべきだと思える2人

C 何か大きなことができると思って参加したが、既に諦めている6名（後に1人は辞め、5人は新たなゴールへ）

D ことの成り行きを傍観している3人

プロジェクトの話し合いの場では主にAの4人が中心となっていた。しかし、目的意識や動機にズレや温度差があり、初回から言い争いが絶えなかった。そこで、改めて全員の目的を共有するところからスタートし、すべきことを挙げて役割分担（現地班・聞き込み班・調査班）をすることになった。簡単な活動報告はgoogle classroomを活用して共有を図り、1学期後半は全体共有の時間に充てた。

1学期を終える頃になってもなかなか状況は改善に向かわず話し合いが続いた。中には、急がずにデータや開けるメリットを丁寧に集めよう、という建設的な意見もあったが、「無理ではないか」「目的の見直しが必要ではないか」というB,Cの意向に対しAの子どもたちは、声を荒げたり、参加する姿勢に対して全体に苦言を呈したりする様子が見られた。Aは「やってもいないのにできないと決めつけるのはおかしい」とBやCを批判し、B,Cは「メリットがほとんどないのに、大学が動くわけがない。」の一点張りで平行線を辿った。Dは話し合い中ほとんど発言をしないが、どんなことを考えているか問うてみると、「そもそも話し合いの目的がズレている」「なんで西門を開けたいのかがきちんと共有されていないのが問題」など、話し合いを俯瞰した意見が返ってきた。その意見を全体に向けて伝えるよう教師から促したところ、少しずつDの立場の子が話し合いの場を調整するような意見を出すようになっていった。この頃から、Aの中でも一番西門の開門に需要がある児童が、話し合いがうまくいかないことについて、振り返りで悩んでいることを書くようになった。前半は不満や怒りが中心であったが、どうすればスムーズに話し合えるのか、どんな話し方を

すればよいのかについて考えていたため、「否定ではなく、どうすればみんなを巻き込んでいけるのか」「共通の目的は何か」など話し合いの視点をいくつか提案した。また、話し合いのスタイルを普段のてつがく対話と同じようにサークルに変えたことで、徐々に落ち着いて聴き合う姿が見られるようになった。最後の話し合いでお互いに意見を出し合い、了解したこととしては、「西門に限らず、学校をよくするプロジェクトとしてもよいのではないか。」とあえて目的を広義に捉えることにより、実現しやすい活動も視野にいれていくことであった。また、この時点でプロジェクトを離脱したいと言いついたメンバーがいた。理由は、他プロジェクトに魅力を感じたため移動したいとのことであった。この件についても本人を交えて皆で話し合い、「小学校最後のプロジェクトだからやりたいことをやる」を認めようということが共有された。

「学校をよくしよう」PJと名称を変え、2学期からは「西門チーム」と「シャープペンシルチーム」（シャープペンシルを学校で使えるようにすることを目的としたPJ）に分かれて活動が再開された。目的は分かれてしまったが、目的が明確になったからこそ2学期以降の各活動ペースが飛躍的に伸びていった事例である。

③ 活動を終えて —「つくるフェス」の開催企画—

プロジェクトの活動自体は2学期をもって終了しているが、これまでの取り組みを他学年や保護者に関くための「つくるフェス」を現在企画、準備している。開催は2日間に渡り、1日目は下級生（3～5年）に向けてプロジェクトの取り組みを「過程」に焦点を当てて伝える。2日目は対象を変え、同級生と保護者や家族に向けて、取り組みの「成果」を発表する場とした。プロジェクトの集大成とは何かを話し合い、イベントの目的や開催方法など6年主体で決めてきた。このイベントは学年で取り組む最後の大きなプロジェクトとして、実行委員を中心に全員が企画運営に携わる形で現在進行中である。



④ 6年生にとっての「プロジェクトとは？」

今回、「小学校生活を振り返って、印象深かったことは何か？」と問うと、すぐに「プロジェクト」と数名から声があがった。そこで、対話のテーマを「プロジェクト型活動」として、問いを決めるために「プロジェクトについて、みんなに聞いてみたいこと」と「あなたにとってプロジェクト活動を一言で表すなら？」を記述することにした。以下に、子どもたちが書いた「問い」と自分にとっての「プロジェクトとは」を示す。本時は以下の中から前日に皆で決めた問いについて対話を進めていく。

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト活動において最も重要なことは何か ・プロジェクト活動を始めた頃と今とではどう成長したか ・なぜプロジェクト活動を行うのか（プロジェクトを行う意味） ・プロジェクトを自分で選ぶとどんないいことがあるか ・プロジェクトを継続してやるには「好き」は必要か ・今までどうやってプロジェクトを決めてきたのか ・プロジェクトをやることによって何を学んだか ・プロジェクトでどんなことが体験できたのか ・プロジェクトの何が楽しい、面白いのか ・プロジェクトのゴールと過程、どちらが大切か ・プロジェクト活動と調べ学習の差とは | <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトとは（意味とは） ・プロジェクトでの失敗 ・メンバーと協力するにはどうすれば？ ・プロジェクト内で意見が分かれた時どうするか ・この学校はなぜプロジェクト活動をしているのか ・5年からどれくらいジャンプアップした ・低学年の時とのプロジェクトの違いは ・プロジェクトは本当に意味があったのか ・皆で集まって行う意味は |
|--|---|

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちのやりたいことを極める活動 ・社会に出るための練習 ・不可能を可能にする ・自分の趣味が暴露されるところ ・自分の興味を追求していくもの ・チームで行うRPG ・相手と協力しながらゴールを達成するために進むこと ・学校の楽しみ ・協力が大切な活動 ・飛行機を作る活動 ・過程が大切なもの ・世の中 ・自分が好きなことを同じ思いの仲間とともに深める活動 ・協力 | <ul style="list-style-type: none"> ・自由と責任 ・集い ・映画をつくること ・好きなことを深める ・自由な考えで何かをする ・より道大事 ・目標に向かって活動すること ・好きなことを突き進んでやること ・好きなことを探究する時間 ・失敗から成功させるために努力する時間 ・共通した活動をしたい人たちで集まり、決めたゴールに向かって進むこと ・命 ・（1名欠席） |
|---|---|

①テーマ設定について

第1回 対話をする意味とは？ 対話のテーマ決め

第2回 居心地が良いクラスとは① 居心地が「良い」と「悪い」

第3回 居心地が良いクラスとは② 居心地が「悪い」をなくせば「良い」？

第4回 居心地が良いクラスとは③「やめて」が通用しないのはなぜか

第5回 本当の世界 自分の見る世界

第6回 本当の自分って何だろう

第7回 個性が出しすぎると嫌われるのか① 良い個性と悪い個性

第8回 個性を出しすぎると嫌われるのか② 個性は生まれつきだから不平等？

第9回 (てつがく対話って何？－縦割り班でてつがく対話をするために－)

第10回（グループでミニてつがく対話－縦割り班でてつがく対話をするために－）

第11回 個性を出しすぎると嫌われるのか③ 個性は何に影響を受けるのか

第12回 なぜ嫌な勉強をしなければいけないの？－哲学者河野先生をお迎えして－

第13回 なぜゲームにハマるのか (裏テーマ/対話が「深まる」とは?)

第14回 子どもはなぜ蟻を殺すのか（

第15回 「友達」と「親友」は何が違う？

第16回 小学校生活を振り返って（プロジェクトについて）…本時

第17回 最終回（テーマは未定）



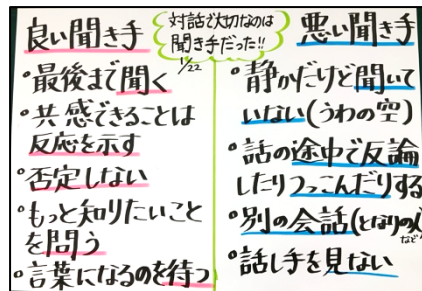
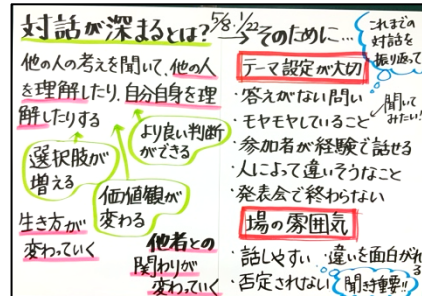
てつがく対話の ルール

- ① 何を言ってもいい
- ② 人の言うことに対して
否定的な態度はとらない
- ③ 発言せずに聞いていてもいい
- ④ お互いに問いかけるように
- ⑤ 知識ではなく
自分の経験で話す
- ⑥ 意見が変わってもいい
- ⑦ 分からなくてもいい

②対話の形式

これまで、小グループでの対話以外は学級27名全員でサークルを作って対話をしていた。発言は挙手制で、ファシリテーターや板書は必要に応じて教員が行っていた。しかし、回を重ねるごとに発言する人に偏りが見られるようになった。個別に事後のふり返りの記述を見ると対話の内容についてよく考えていることは見とれるものの、なかなか対話の場で表出していない。そこで2学期は事後のふり返り内容を全員分一覧にして次の対話の前に配付していた時期もあった。

試行錯誤を重ねていた2学期の最後に、河野哲也先生をお迎えし、初めて金魚鉢型の対話（二重の円で座り、前半後半に分けて対話）を行った。前半と後半に分けて対話をするにより、今までよりも発言しやすくなったと感じている子が多く、話すことを考える時間だけではなく、じっくり聴く時間があるので考えをまとめやすいというふり返りも見られた。そこで、3学期は金魚鉢型の対話で進めることを確認し、様々なテーマでてつがく対話をしながら、対話そのものをふり返る機会を作るようにした。



③振り返り

毎回、てつかく対話が終わった後はその場で個人のふり返りを行う。対話の内容を受けて個に戻り、自分自身はどう考えるのか、またどう変わったのかを自由に記述する。以前は専用のノートに書いていたが、時間短縮と共有のしやすさから今年度は google のスライドに書き溜めていき、classroom で管理することにした。（右図はある子どもの第 2 回のふり返りの記述）このふり返りの中から次の対話の問いを拾うこともあった。

